

---

# 天に輝く日輪の如く

まどろみ猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天に輝く日輪の如く

### 【Nコード】

N4170Z

### 【作者名】

まどろみ猫

### 【あらすじ】

時は戦国、処は安芸の国。下級武士の娘である小菊こぎくは、突然の事態に戸惑うことしかできなかった…。安芸の国のみならず、中国地方を統べる冷酷なる策略家・毛利元就からのお呼び出し。拒否などできるわけもなく、殺される覚悟を決めた小菊は、高松城へ連れて行かれる…。

日輪の申し子と、小さな菊の花のような娘。他者を拒み孤独に生きる青年と、他者の幸せを願う心優しい娘。

これは、そんな二人の、目には見えない『愛』の物語…。

## 小さな菊の花（前書き）

はじめまして、まどろみ猫と申します。小説を書くのが趣味です。慣れないパソコンで、人生初の投稿です。

読んで下さる方へ。私は、少しでも上達したいので、できれば感想やアドバイスをお願いします。厳しいお言葉も、自らの糧にしたいと思っております。…ですが、登場人物への批判はおやめください。

この作品は、戦国BASARAの二次創作です。毛利元就様に、幸せになっていただきたいと書きました。しかし、元就様のキャラが崩壊しておりますので、無理と感じた方はお逃げください。

以上、わかったよという方はお読みください。

## 小さな菊の花

「小菊！小菊はおるか！」

屋敷に響く、父上の声。

縁側で、美しく咲き誇る桜を眺めていた私は、驚いた。

「父上！小菊は、ここにおります！」

普段温和で滅多に大声など出さない父上が、あのように必死に私を呼ぶなんて、何事かあったに違いない。

「小菊！…うう」

「ち、父上！？」

駆け寄ってこられた父上は私を見るなり、泣きだしてしまわれた。どうされたのですか、父上？」

尋ねても、溢れる涙を拭いてもせずに男泣きにくれる父上。

…父上の涙を見たのは、あの日以来。母上が、亡くなった日。困惑と、不安。それらが胸中に、じわじわと広がっていく。

「…こ、こぎくを…そなた、を…」

「？私が、どうかしたのですか？」

しゃくりあげながらも、父上は言葉を紡ぎだす。

「元就様が、小菊を、た、高松城に、連れてこい、と…」

一瞬、目の前が真っ暗になった。

「わ、私を、ですか？この中国地方を統べていらっしやる毛利元就様が、そうおっしゃられたのですか？」

有り得ない。何かの、間違いだ。そう、思いたいのには。

「高松城から、使いが来た…元就様が、直々の文を…」

父上が握りしめて、くしゃくしゃになってしまった文。

震える手で、受け取る。とても綺麗で読みやすい字が、目に入る。

「貴様の娘を、我が居城である高松城へ連れてこい。従わなければ、貴様の家は取り潰す」

記されている名は、毛利元就。安芸の国の君主にして、中国地方

を統治する、冷酷なる策略家。

「…一体、どういうことでしょう…」

下級武士の娘である私と、元就様に面識などない。なのに、どうして。

「…儂にも、さ、さっぱり、わからん…。あのお方が考えておられることなど…」

そう言うと、父上は再び号泣し始めた。

私は、ただ茫然とすることしかできない。

暖かい風が吹いて、庭の桜の花が、宙を舞った…。

道中、お迎えの輿の中で、私はほんやりと考えていた。

お城に着いたら、どうなるのだろうか。殺されるのかもしれない。

「…理由くらい、教えてくださるかしら…」

四角く切り取られた、青空。香ってくる、花の、優しい香り。

今日が見納めになるかもしれない世界は美しく、輝いて見えた。

片田舎の下級武士の屋敷と、国主のお城では、比較することがま  
ず間違っている。

「…すごいです…」

輿から降りて、広い広い部屋に案内される。襖も屏風も、決して  
派手ではないが、一目で質の良さがわかった。

一番良い着物を着てきたが、このお城の女中さんのほうが、良い  
着物を着ているかもしれない。

世界が、違うのだ。しみじみと、そう思った。

広い部屋で、一人座している間、ずっと父上のことを考えていた。  
母上に先立たれ、後妻を娶ることなく、ただ私の成長を楽しみに  
して、不器用な愛情を注いでくれた父上。

女の身でありながら、学ぶことを好んだ私を、笑顔で褒めてくれ  
た父上。

木に登って降りられなくなった私を、助けてくれた父上。

お城からお迎えが来たときも、泣いていた父上。

『儂が泣くのは、そなたが嫁ぐときと思っておったのに……』

何も、言えなかった。無事で帰ってまいりますなどと、果たせるかわからない約束は、できなかった。

生きるか死ぬか。私の命は、元就様の掌の上。

二度と、会えないかもしれない。…嗚呼。

「…別れの言葉も、感謝の言葉も、言えなかった…」

後悔、している。何も伝えられなかったことを。

そうして、私は独り泣き始めた。

襖が、静かに開かれた。

部屋に入ってきたのは、一人の年若い男性。

私は慌てて涙を拭い、顔を上げた。

「……………」  
無言で、男性は私を見つめている。無表情で。

(こ、この方は一体どなたなのでしょう？ずいぶん細身で、お顔が整っていらつしやる…ああ、なんだか視線が痛くて、整っておられるから無表情なのが余計に怖いです…)

突然の男性の登場に、混乱した私の口について出た言葉は、

「あの、その…こんにちは…」

しどろもどろな、挨拶だった。

「……………」  
男性は無表情なまま、私の前に立った。

(…お、怒らせてしまったのでしょうか!?なんだか、眉間におしわができてくるような…)

「……………」そなたが、小菊か？」

広い部屋に、静かに響いた男性の声は、氷のように冷たかった。耳を疑うほど冷たいその声に、背が震った。

「は、はい…私が、小菊ですが…。あの、あなた様の、お名前は…」

「？」

見上げた男性の口が、ゆっくりと開かれる。  
「我が名は、毛利元就。日輪の申し子なり」

## 小さな菊の花（後書き）

…この作品を、読んで下さった方はいらっしゃるのでしょうか？  
他の方々が投稿された作品を読んで、ますます自信を失くす私です。読むのと書くのでは大違い…でも書きたい。そんな私のことを馬鹿だと思われた方はいらっしゃるでしょうが、それでも私は書き続けます。

投稿は、時間が許す限り頑張ります。小説を読むのと書くのを至福とする私ですが、仕事もありますので不定期となってしまうでしょう。それでも…読んで下さる方がおられたら…嬉しいですよ。

最後に。読んでくださって、ありがとうございました。



## 記憶の中の面影を追う（前書き）

どうやら、私の書いた作品を読んでくださった方がいらっしやうたようです。ありがとうございます！これからも頑張りますので、よろしければご覧になってください。

…今回は元就様視点です。ここまででは、キャラ崩壊もたいしたことありません。この話以降の元就様は、暴走されます。

## 記憶の中の面影を追う

我は、安芸の国を治める毛利元就。

毛利の御家を守るのが、我の役目。為さねばならぬこと。

そのためならばと、人の心を殺し、この激しき動乱の時代を生き抜くため、面を被った。

我にあるものは、毛利の家と、それを守るといふ重責と、天に輝く日輪のみ。

…それでよいのだ。あの、四国の鬼のようになど、我は生きられぬ。

誰にも、我は理解できぬ。仕方のないことだ。

所詮は我も、駒の一つでしかないのだ…。

各地の動きに気を払い、政務をこなし、日輪を崇める…。

我に、休息などない。気を抜くことなど、あつてはならない。

謀反によって織田は滅び、霸王・豊臣秀吉が台頭してきた。あの  
大猿の理想と、それを為さんとするために手にした軍事力を考慮すれば、誰でも予想できることではあるが。

…我は、毛利の家の繁栄と、中国地方が安泰ならば、それ以外は  
どうでもよい。

城の天守から、輿がやつてくるのが見えた。

あの輿の中に、あやつがいる…。

ざわと、心が騒いだ。…だが、不快ではない。

「…礼を、せねばならぬからな」

あやつは、憶えておるだろうか？

城の一室。中央で一人座しているあやつのは、驚くほど小さく見えた。

…まあ、私の表情は、変わらず無表情なのだが。

我が部屋に入ってきたのに気付いて、あやつが顔を上げた。

…私の鼓動が、少し早まった気がする。

切り揃えられた黒髪は濡れたように艶やかで、肌は白く、人形のように整った顔立ちをしていた。

実際、袖を動かさなければ、本当に人形が安置してあるかのように見えただろう。

長い睫毛に縁どられた、大きな漆黒の瞳に、我が映っていた。

「……………」

言おうと思っていた言葉が、出てこない。座していた者は、私の記憶の中にあやつとは、もはや別の者だった。

我が何も言わぬので、困惑したように視線を揺らしていた娘の、薄桃色の唇が動く。

「あの、その…こんにちは…」

声は、鈴が転がるかのように、澄んでいた。

「……………」

どうやら、我がこの城の城主である毛利元就だと気付いておらぬようだ。もしくは、混乱しておるのか…。

無言のまま、私は娘の前に立つ。

…近くで見ても、やはり小さい。娘の中でも、小柄なほうだろう。作り物のような娘。私はふと、娘の頬に涙の跡があるのに気が付いた。先程袖を動かしていたのは、流していた涙を拭っていたのだろうか？

なぜ、泣いていたのか。我には、解らぬ。

…否。我に理解できぬことなど、あるはずがない。

「……………」

…そなたが、小菊か？  
できるだけ、穏やかな声で問う。下級武士の娘とはいえ、幼き日の我を助けてくれた恩人なのだ。

「は、はい…私が、小菊ですが…。あの、あなた様の、お名前は…？」

我を見上げる娘の瞳には、怯えの色があつた。見慣れた、怯えた色。しかし、我が駒どもとはどこか違う。

数瞬で、合点がいった。この娘は、冷酷と称される毛利元就ではなく、突然現れた見知らぬ男に怯えておるのだ。

さて、名を尋ねられて答えぬわけにはいくまい。この小さな娘が、我が名を聞いて畏縮することは確實だが。

「我が名は、毛利元就。日輪の申し子なり」

## 記憶の中の面影を追う（後書き）

：実を言いますと、私は控えめで健気な女の子が大好きなのです。小菊ちゃんには、私の好みの女の子です。こんな優しい子が、元就様の御心を癒してくれたらという願望が、はっきりと文字に表れています。

読んでくださった方へ、心よりお礼申し上げます。感想、アドバイスお待ちしておりますが、登場人物に対する批判だけはおやめください。

次話も、数日内に投稿してみせますので、読んでいただければ幸いです。

## ある日の武将達（前書き）

今回は西海の鬼・長曾我部元親さんと、空気の風来坊である前田慶次さんが初登場です。アニキは四国に、慶次はふらふらしています。

さて、上達したいとのたまった私ですが、書くにあたり戦国時代の生活様式や時代背景などを調べていません。あれ？おかしいなと感じられると思います。言い訳はしませんが、本当にごめんなさい。私にあるのは、書きたいという思いと元就様の幸せだけです。それでもいいよという方は、どうぞお読みください！

## ある日の武将達

「…もみじまんじゅうってのは、うめえが甘すぎんぜ」

安芸の国の土産物の代名詞であるもみじまんじゅうを嚙下して、俺は呟いた。

毛利の野郎が治める安芸。探りに行ったかわいい子分共が送ってきたのは、当然、もみじまんじゅうだけではない。

「…何々い…」

ずずつと熱い茶をすすり、報告書を読み始める。

『アニキ！お元気ですか！？俺達は元気にしてます！中国は毛利のおかげで平穏ですが、やっぱり俺達はアニキがいつす！ああ、またアニキと一緒に海にでてえなあ…』

お世辞にも読みやすいとはいえない字で、子分共は中国で起こった出来事と、俺への想いを書き綴っている。

「…なんだか、報告書って感じじゃねえな。まあ、あいつらしいぜ」

苦笑する。海の荒くれには、平穏な毛利の御膝元は、刺激が少なくて物足りないのだろう。

『…でも、俺達の動きがアニキの役に立つんなら、俺達頑張りますぜ！あ、そういえば、妙な噂を聞いたんですが…』

妙な噂？湯呑を置き、真剣な顔で読み進める。

『ほんとかどうか、まだわからないんですが、毛利の野郎、城に女を一人困ってるって噂です！もう、俺達たまげちまりました！だって、あの毛利の野郎がですぜ！？』

「毛利に女あ！？嘘だろ、おい！？」

叫んでから、俺は顎に手を当てて考え始めた。

(…いやいや、それは嘘だろ。あの毛利が…あのオクラが、女に興味を示したなんて聞いたことねえぞ。なんてったって、「我は日輪と結婚する！」とかぶつとんだことぬかしそうな、あの毛利だから

な…。けど、あの野郎も男だからな。…ほっせえし、女みてえに綺麗な顔してやがるが)

気になる。ものすごく気になる。正直、勢力を拡大している豊臣の猿なんかよりも、こっちのほうがはるかに気になる。

「おもしろえじゃねえか」

自然と、口の端が吊り上る。何度も言うが、あのオクラがだぜ!?

「ちよつくら、拝みにいつてくるとすつか!」

もう、なんて言えばいいのか。…楽しみすぎるぜ!

「…ん?今、西のほうから恋の匂いがしたような…」

京の都。桜の木の下で一眠りしていた前田慶次は、目を瞬かせながら起き上った。

「キイー!キイー!」

相棒の夢吉が、ぴょんぴょんと飛び跳ねる。

「どうした、夢吉?…もしかして、お前も恋の匂いを嗅ぎ取ったのか?」

「キキイツ!」

夢吉は元気よく答え、西の方を向く。

「キキツ!キキイツ!」

行こう、行こう!そう、夢吉は言っていた。

「うーん…いいねいいね!一体、誰の恋が見つかるだろうね」

超刀を担ぎ、夢吉を肩にのっけて、ゆっくりと歩み出す。

「元親のところにも、寄らせてもらおうか!」

達者で暮らしているであろう、友の顔を思い出しながら、慶次は日ノ本の西を目指すのであった…。

「キキツ」

(訳:いつまでも他人の色恋に首突っこんでないで、そろそろいい人見つけたら?)



## ある日の武将達（後書き）

アニキの口調は、なかなか難しいです。というか、小菊ちゃんの口調もあまり定まっていません。…丁寧語と敬語は、違うのです。図書館で、本を探したのですが、なぜか見つからずに突っ走りました。

構想はあるのですが、書いたらものすごく長くなってしまいます。お付き合いいただけたら、と…願っております。

私の前書きと後書き、長いでしょうか？読みにくいでしょうか？読んで下さった方へ。ありがとうございます！

## 叶わぬ望み（前書き）

： 本当に、パソコンって難しいですね。サイト？HP？を作って書いた作品を載せたいなどと考えているのですが、まったくやり方がわかりません。あ、でも初心者がそんな真似すると危険でしょうから、やっぱりやめたほうがいいんでしょうね。

今回は小菊ちゃん視点と元就様視点です。どうぞ、お読みください。

## 叶わぬ望み

頭の中が真っ白になった。冗談ではなく。

（え？このお方が元就様？お若いとはお聞きしていたけれど、私より幾つか歳が上なだけなんて…。っああ！私、中国地方の支配者たるお方に『こんにちは』なんて気安く挨拶してしまいました！なんて無礼なことを…！）

「……あ、あの、元就様…」

謝罪しなくては。そう思い、そうしようとするのに、緊張して上手く言葉が出てきそうにない。

冷や汗が流れ、口の中がからからに乾いている。

（うつっ！な、なんだか頭がくらくらしてきました…）

「…何か、望みはあるか？」

あまりの緊張に意識が遠のきかけた私に、元就様がお言葉をかけてくださいました。

「の、望み…ですか…？」

予想だにしないお言葉に、私は戸惑った。

「そうだ。そなたの望みを、我が一つ叶えてやるっ」

申してみよと、促される。片膝をつき、私のような者と視線を合わされた元就様は、面を被ったかのような無表情。

帰りたい。生まれ育った屋敷に。父上の、元に。

望みは、ただそれだけだったのに。その、はずだったのに。

「…笑って、くださいませんか？」

…まったくもって、この娘には驚かされた。この我が、だ。

着物、簪、宝玉、金子、父親の昇格、領地拝領。大方、それらを望むであろうと思っていたが、娘の望みは私の想定を超えるものだった。

「…笑って、くださいませんか？」

おずおずと、娘は言った。敵兵はもちろん、家臣や兵士達すら恐れ、ろくに合わせようとしないう、我の凍てついた眼を、

真つ直ぐに、見て。

「なぜだ？」

想定外の答え。その、真意はなんだ？

我が笑つて、そなたが得することなど、何一つとしてあるまい？

「元就様、お会いしてから一度も感情を表されなかったものですから、その……」

俯き、ただでさえ小さい身体をますます縮めて、囁くように娘は言った。

「……笑まれたお顔を、拝見したいと……思い、まして……」

俯いてしまったので、どのような表情をしておるのかわからぬ。

「……我はといえば、相も変わらぬ無表情。笑むのが必要であるなら、どんな時だとして笑つてみせよう。……が、

「……我は、心から笑むことはできぬ。……心など、持ち合わせてはおらぬゆえ」

娘が、驚いたように我を見つめてくる。

毛利を守るといふ存在意義のため、我は心を凍りつかせた。ゆえに、笑むときの我の心には、一部の喜びも嬉しさも楽しさもない。

ただ、我の氷の面が、笑みを形作るのみ。……それでいいのだ。笑みなど……。

「……そんなこと、ないですよ」

娘の、優しく穏やかな声。

「元就様、今一瞬だけ、悲しそうでした。感情のある人ならば、笑うこともできるはずですよ」

大丈夫ですよ。そう言つて、娘は微笑んだ。

ああ。……やはり、この娘はあやつなのだ。

幼き我を、迫りくる闇に怯える我を、救ったときと同じ。

変わらぬ笑顔。変わらぬ優しさ。

……変わったのは、変わってしまったのは、我の方なのだ。

## 叶わぬ望み（後書き）

…うう…感想が…評価がほしいです。どうか、お願いします。

他のジャンル（ポケットモンスターやゲーム）でも投稿したいと思っておりますので、お見かけになられたらぜひご覧になってください！

一応、自分で考えた作品も書いて投稿する予定です。

ありがとうございました！よろしければ次回も、お願いします！

## 申し子と菊の花（前書き）

小菊ちゃんが、高松城で暮らしはじめました。お城の人達は、あんな幼い子（年齢は十七歳です）を、元就様はどうするのだろうと思っっています。もちろん、元就様は駒に事細かく事情を説明したりはしません。ただ客人としてもてなせと命じただけです。

それでは、お読みください。

## 申し子と菊の花

…元就様は、結局、私を呼び寄せた訳を教えてくださいださらなかった。お気に障ったのかもしれない。あんなこと、言つべきではなかったのかも知れない。

でも、心などないとおっしゃった元就様は、本当に悲しげだった。それは、ほんの一瞬で、すぐかき消されてしまったけれど。

「…冷酷な方、なのかしら？」

話に聞いていた方とは、どこか違うような気がした。

与えられた部屋で、一人考える。疑問は山のようにあるのに、私にはそれらを解決するのに必要な、情報が不足している。

「それにしても、どうして私を…」

元就様のお人柄、これからの高松城での生活、父上が今頃どうしているか…などなど、思うことは多々あれど、一番の疑問はやはりそれだった。

「…わからないことばかりです…」

ため息をつくことしかできない、私だった。

娘…小菊が城に来て、数日経った。他愛のない話をするだけだが、不思議と我はそれを楽しんでおる。

どうやら小菊は、我と初対面だと思っておるらしい。我としても、自分より年下の女子に助けられたことなど、己の口からは言いたくはない。言いたくはないのだが…。

礼は、せねばなるまい。そう考え、望みを訊いたというに…。

まさか、我の笑顔とは…。計算してないぞ！

晴れ渡る空を見上げる。今日も、日輪は美しく輝いており、平穩そのもの。素晴らしい日々である。

「…感情、心…」

日輪を崇めるとき、胸の辺りが暖かくなる。

駒がしくじったとき、苛立つ。

必要ないと、邪魔なだけだと、凍らせ捨て去ったはずのもの。まだ、我の中に残っているのだろうか？

残っているとすれば…我は、それを…。

消さねば、なるまい。

全ては…毛利の、為に。

「…書物が、たくさん…！」

一室にあるのは、文机と、棚にきちんと収納された大量の書物。

「いつでも、好きな時に読むとよい。我が許可する」

こんなにもたくさん書物を所有しておられるとは…流石、智将です元就様！

「ありがとうございます元就様！とても嬉しいです！」

喜びと興奮で、頬が上気しているのがわかる。私にとって、ここは天国だ。

「…ふん」

鼻を鳴らして、元就様は部屋から出て行ってしまわれた。お忙しい方なので、お仕事を片付けに行かれたのだろう。

元就様がお仕事をされているというのに、私などが書物を読んでいてよいのだろうか。

「ああ…まだ見ぬ書物が、私を呼んでいる…！」

しかし、思いとは裏腹に、ふらふらと棚に近づいていく私なのであった…。

「……………」

（何なのだ、あの娘は！？）

あれしきの量の書物で、ああも喜ぶとは…。

『ありがとうございます元就様！とても嬉しいです！』

小菊の声が、上気した頬が、潤んだ瞳が…頭から、離れぬ。

「……………」



(我は、一体どうしたのだ!?)

落ち着けと、己に言い聞かせる。常に、冷静であらねば…。

計算通り。我のこの動揺以外は、計算通りなのだ。

小菊は、喜んだ。それでよい。

我は、喜ぶ小菊を見て…嬉し、かった。

「…よいのだろうか…」

我が、他人の感情に振り回されることなど、あつてよいはずがない。解っておるのに。

それなのに、この胸にあるものは、何なのだ!?

## 申し子と菊の花（後書き）

…私の作品、つまらないでしょうか？駄作でしょうか？もっとギヤグと入れたほうがいいのでしょうか？何気ない生活風景とかも入れたほうがいいでしょうか？…な〜んて、全部意見を求めるようではダメですよ。やっぱり、自分で考えないと！

たとえ、どなたも読んでくださらなくとも、投稿はしますよ私！  
…姉や妹に尋ねたら、投稿して数日で感想を求めるなど叱られました。そうでしょうけど、不安なんですよ…。

今回も読んで下さった方、ありがとうございます…いらっしやいますか？

## 薬酒と月と闇（前書き）

感想いただきました！やったあああああ！です！返信させていただきましたが、この行為はネット上では失礼にあたるのでしょうか？もしそうならば、ごめんなさい。

これから、元就様が暴走されます。公式のあの方とは、ほとんど別人です。ですが、公式であの方にお相手はいないので、ひよつとしたらこうなる可能性もなきしにもあらずです！…ないでしょうが。大丈夫！という方、どうぞ！

## 薬酒と月と闇

「嗚呼…幸せ、です…」

夕餉、湯浴みを済ませた私は、うつとりと呟いた。自室の窓から降り注ぐ、柔らかな月光を浴びながら、

（はあ…あんなにもたくさんのお書物が読み放題なんて…！明日は歌集を読ませていただきましょう…あ、でも、物語も読みたいですよ…）  
などと、本のことばかり考えていた。

「…そなた、聞いておるのか？」

（ずうっと、読んでいたところですが…蝋燭がもつたいないですからね。私は、我儘なんて言うてはいけません。迷惑をかけないようにはしないと…）

物思い（九割が本、一割が元就様への感謝の思い）に耽っている  
と、誰かに肩を掴まれた。

「きゃあ…むぐっ!？」

びっくりして悲鳴を上げかけた口を、手で塞がれる。

「…声を上げるでない。誤解されると面倒ゆえ」

この、感情のこもっていないお声は…。

「わかったか？」

部屋に明かりがないため、黒い影にしか見えない方に、頷いてみせる。

「…よし」

ぱっと、手を離される。

「元就様？いつから、いらっしやっていたのですか？」

影と向き合う。私は月に照らされているが、元就様は闇の中だ。  
もちろん、表情などわかるはずもない。

「先程から声をかけておったが…そなた、気が付かなかったのか？」  
淡々と、言葉が部屋に響く。

「…ごめんなさい。考え事をしていたので…」

失礼ですむことじゃない。一国の主を無視するなんて、殺されたって文句は言えない。

「まあよいわ…ところでそなた、酒は飲めるか？」

「ちやぽんと、水音がした。どうやら、瓶を持っておられるらしい。

「えっと…飲んだことがないので…わからないです」

正直に答える。すると、

「そうか…我が作った薬酒ぞ。特別に飲ませてやろう」

杯を渡される。…断ることなど、できそうにない。

「案ずるな、強い酒ではない」

畏れ多くも、元就様に注いでいただいた。漂う、お酒の匂い…。

「ありがとうございます…では、いただきます」

意を決し、朱塗りの杯に口づける。

(~~~~~!!!!!)

喉が、焼ける。薬草の強い苦味と、微かな甘味。

「…どうだ？口に、合うか？」

期待されているのが、わかる。元就様が、少しでも感情を表してくださったのは嬉しいが、これは…。

(…無理！これは無理ですう！喉がひりひりしています！)

初めて飲んだお酒は、とても『美味しい』と言えるような味ではなかった。薬を飲んだような、ひどい気分。

でも、元就様が、こんな夜更けにわざわざ持参してくださったと思うと…。

「美味しいですよ。ちよつと、苦いですけど」

どうしてだろうか。嬉しくて、喉の痛みも忘れてしまえる。

「…当然よ。我が作った薬酒ぞ？」

暗闇の中。見えない元就様が笑まれたような、そんな気がした…。

昨夜、小菊の元を訪れて、我的手製の薬酒を酌み交わした。

頬をうつすらと赤く染め、小さな白い手で杯を持ち、月光の下で座す単衣姿の小菊には、昼間の可愛らしさとはまったく別の、女と

しての艶やかさがあつた。

筆を止め、己が手を見る。…昨夜、我のこの手は、何をしようとしていた？

抱き寄せ、ようと。酒瓶も杯も投げ捨てて、小菊を抱き寄せようと、しておつた。

我のものに。あの娘を、我がものにしようとして…とどまつた。

あの時の我が持てる理性を総動員して、伸ばしかけた手を止めた。それは、小菊を想つてのことではなかつた。

怖くなつたのだ。我が意のままに小菊を抱いた、その後が。

拒絶を。向けられるであろう、失望と怯えの目を。

嫌だ。そんな目で、見られるのは。小菊の心から、我がいなくなるのは。

我は、我のことしか考えていなかった。そんな己が、何より腹立たしかつた。

「…小菊」

こんな我を、そなたは嫌うだろうか？

## 薬酒と月と闇（後書き）

リアリティーを追求したいのですが、性別だけではどうしようもありません。こればかりは、生物学やら心理学やら、難しい本を読んで調べるしかなさそうです。…男性に質問できることでもないですしね。

ああ…時間だけが、足りない…。

読んで下さった方、ありがとうございました！

鬼の疑惑　く毛利元就は幼女趣味なのか？く（前書き）

サブタイトルからお分かりになられるでしょうが、今回はアニキ視点です。長身、白髪、隻眼の三拍子。目立つこと間違いなしのアニキが、元就様に悟られず安芸の国に入ることなんてできないだろという突っ込みには、こうお答えします…変装してっただんだよ！多分！

注意すべき点としましては、アニキの過去が『姫』です。アニキに姫若子なんて過去はねえという私の妹のような方は、お気を付けてください。

では、どうぞー！



鬼の疑惑　　毛利元就は幼女趣味なのか？

「…毛利の野郎、ああゆうのが好みだったのか！」

城下町。危険を冒してまで、やってきた安芸の国。

茶屋で、うまさうに団子を頬張っているのが、野郎共からの報告にあつた『毛利の女』だ。

ずいぶんちつちえな。俺の腹ぐらいまでしかねえんじゃねえか？あ、でもやつぱ、かわいい顔してんな。お人形みてえだ。

それにしても…駄目だ。想像できねえ。色々。

勘定を払つて、女…てえか、娘は、歩き始めた。特に目当てがあるわけじゃねえのか、並び立つ店に入ろうとはせず、歩いている。行き交う人々を、活気ある町を、娘は楽しそうに見ている。

「…あ。絡まれてやがる」

二、三人の男が、娘の行く手を塞いだ。戸惑う娘の手を掴んで、どこかに引つ張つていこうとする。

大人しいのか、怯えて声が出せないのか。娘は黙つたまま、連れ去られちまいそつだつた。

俺は舌打ちして、通りの陰に目をやる。…何の為に、てめえらがいんだよ？

「仕方ねえな…」

動こうとしない毛利の部下に代わつて、ここは俺が出てやるぜ。

感謝しろよ、毛利元就？

俺の外見は、『目立つ』。髪は白くて、左目には眼帯。背は高く、海で鍛えられた筋力は伊達じゃねえ…おっと、独眼竜の台詞盗つちまつた。

ま、とにかく、野郎が何人かかってこようが、俺の敵じゃねえつてことだ。

「大丈夫か？」

数秒で連中を沈めて、訊く。

「は、はい！助けていただいて、ありがとうございます！」  
礼を言われて、悪い気はしねえ。毛利の女だから、「助けてなんて、言ってないわ！」とか言うかと思っただが、礼儀正しい娘みてえだ。

…ちつちえな。ほんと。

姫若子と呼ばれていた時代。女装（よく女の子に間違われたもんだ）してお人形で遊んでいた俺は、今では男の中の男だ…。

「！？…子供扱いしないでください…」

実は結構、かわいいもんが好きだ。

娘の頭を撫でながら、俺は思った。

（…はあ、かわいいなあこいつ…毛利にゃあ、もったいねえ…）  
髪はさらさらで、さわり心地がいい。

「あの…この方たち…」

気絶して地面に転がっている連中に、娘が目を向ける。

「大丈夫でしょうか？…お医者様を、呼ばなくても…」

…ほんとに、毛利の女なのか？あの冷徹野郎の？

「ほっときゃ、いずれ目え覚ますさ」

力は加減しておいた。怪我もしてねえはずだ。

すっと、娘が動いた。連中の一人の横に屈んで…。

「…うん。お、重い…」

腕を引つ張り始めた。…何してんだ？

「あんだ、何を…」

娘が、振り向く。

「このままにしておいたら、踏まれてしまいますから…」

また、挑戦する。びくともしない。

それでも、娘はあきらめずに、何度も何度も挑戦する。

…ほんと、何なんだ？こいつ…。

「本当にありがとうございました！助けていただいたうえ、お手を

煩わせてしまつて…」

娘の細腕では、大の男を移動させるなんて真似は到底不可能。結局、俺が手を貸した。

「いいつてことよ。気にすんな」

俺の武器である碇槍の重さに比べれば、軽いもんだ。

「あ、まだお名前を伺っていませんでしたね。私、小菊と申します」  
につこり微笑んで尋ねてきた小菊に、どう答えるべきか。まさか、本名を名乗るわけにはいかない。

「…や、弥三郎つてんだ」

「…あゝ！幼名が出ちまつた！

「弥三郎さん！お礼といつてはなんですが、よろしかったらあそこのお茶屋さんで一服しませんか？」

にこにここと、まつたく疑いもせず誘ってくる小菊。

「…かわいいじゃねえか、畜生！

羨ましいぜ、毛利元就…。」

攫われそうになった私を助けてくださった方は、弥三郎さんといつて、どこか普通の人と違っていた。

髪は綺麗な白色で、左目に包帯を巻き、とても背の高い方だった。私は子供と勘違いされたのか、頭を撫でられてしまった。

「…背が低くて得をすることは、ない気がする。」

「弥三郎さん、甘いものは好きですか？」

「ん？…好きってほどじゃねえが、嫌いってほどでもねえな」

「今日は春らしい、暖かい日ですね」

「ああ。海でのんびり釣りでもしたくなる陽気だな」

「釣りですか…私は、読書がしたくなります」

「あんだ、幾つだ？十三くらいか？」

「…見えないかもしれないですけど、十七です…」

「おくらを、どう思う？」

「おくらですか？…美味しいと思いますよ？健康にもよさそうです」

ゆつたりと流れる時間。とりとめのない会話。

(…平和ですねえ)

お茶とお団子が、美味しい。

「…あんだ、人形みたいでかわいいな」

また、頭を撫でられる。

「子ども扱いしないでくださいってば！」

「…そんなに、子供っぽいのだろうか？父上も、屋敷の皆も、私のことを『お人形』のようでかわいいと、よく言ってくれていたが。

弥三郎さんの大きな手を、なんとか払いのける。すると。  
がしっ。

「え？」

「な、ちよっと付き合ってくれねえか!？」

澄んだ海のように青い瞳を輝かせ、私の両手を握る弥三郎さん。

「っ、付き合っつて、何を…!」

「悪いようにはしねえ!行こうぜ!」

爽やかな笑顔を浮かべる弥三郎さん。

「…知らない者についていってはならぬと、元就様に言われているのですが…」。

(弥三郎さん、優しいお人ですし…大丈夫ですよ)

鬼の疑惑　く毛利元就は幼女趣味なのか？く（後書き）

アニキは身長約190？。元就様は身長約170？。小菊ちゃんの身長は140く150？です。アニキの肩に元就様の頭が届くか届かないくらいです。小菊ちゃんは、アニキのお腹辺り、元就様の胸辺りに頭がくるくらいの身長です。∴ちっちゃいですね。お二人の身長は、公式サイトを調べたのですがわかりませんでした。なので、勝手に決めてしまいました。すみません。

お読みになつてくださった方、ありがとうございました！

## 着物と人形（前書き）

今まで投稿した作品を読み直して気が付いたことが一つ。…短い！短すぎる！1話が非常に短い！…区切りを、もっと長くしたほうがいいのでしょうか。

金欠のイメージがあるアニキですが、領主ですからこれぐらいの金子は持ち合わせています。

## 着物と人形

政務を終わらせ、我は独りで待つておる。

『よいか？知らぬ者についていつてはならぬぞ？日輪が沈む前には戻るのだぞ？』

城下町の様子を見てみたいと言う小菊の外出を、許可したのはよ  
いが…。

『…そなたは非力なだから、騒動などに首を突っ込んでならぬぞ？』

やはり、ついていけばよかった。供はいらぬと小菊は申したが、  
そういうわけにもいかぬ。

『…小菊が無事城に戻るよう、しっかり見張っておれ。…傷一つあれば、解つておろうな？』

配下を二、三人つけておいた。それでも、安心できぬ。

あんなにも愛らしく無垢な娘を、世の男達が放っておくとは思えぬ。…もし、あの娘に触れる者あらば…。

輪刀。我の、武器。

「…切り刻んでくれる」

日輪はまだ天高く、我を照らしておる。

「小菊、早く戻らぬか…」

そなたがおらねば、政務も鍛錬も読書も食事も、何一つ気がそぞろになつてしまうのだ。

ああ。…やつべえ、楽しい。

紅珊瑚の玉簪、白地に桜の花模様の着物、朱色の帯、黒漆に赤い鼻緒の履物…結構高くついたが、これだけ完璧に着こなしてくれりやあ満足だ。

「ど、どうですか…？似合っています？」

くるりと、その場で一回転する人形…ではなく、小菊。

「ああもうかわいいぜ！」

ぐりぐりと頭を撫でてやりたい衝動を、なんとか抑える。せつかく結わえた髪が、乱れてしまう。

芸術だな。これはもう、芸術の域だ。

「そ、そうですか？…こういう格好したの初めてですけど、喜んでいただけたようでよかったです」

…微笑むな！心臓にわりい！

「年頃の娘なんだから、そういうふうに着飾ってみるよ。…好きなやつに見せてやれば、きつと大喜びすんぜ？」

毛利とか毛利とか毛利とかな！あの野郎に見せてやりてえ！

「好きな方、ですか…？」

一瞬きよとんとしていた小菊の頬が、うつすら赤くなる。

「お、いんのか？好きなやつ」

茶化すように言うと、

「ち、違います！好きとか、そういうのじゃ…！」

茹蛸みてえに真っ赤になって、俯いちゃった。

…毛利に、マジで殺意が湧いたぜ…！

「元就様、ただいま戻りました！お団子買ってきましたから、よろしかったら召し上がってください」

差し出された包みを、受け取る。目は、小菊に釘付けだ。

「…そなた、そのような着物を持っておったか？」

着物だけではない。簪も。

「あ…町で知り合った方に、買っていただいたのですが…。へ、変ですか…？」

我と小菊の身長差。自然、小菊は我を見上げる形になる。

「いや…よく、似合っておる」

なぜ、我はこんなときでも無表情なのか…。まったく、嫌になる。笑って「かわいらしい」と、言うこともできぬ。

「ありがとうございます」



にこりと微笑む小菊は、可憐な花のようで…。  
うかつに、触れられぬ。壊してしまつては、取り返しがつかぬ。

## 着物と人形（後書き）

投稿を失敗し、落ち込んでいたのですが、何とか投稿できました！パソコンの機嫌が悪かったのでしょうか？

視点がころころ変わりますが、どうかご容赦ください。…読みにくいでしょうが。

お読みくださり、ありがとうございました！

## 菊の花と、露（前書き）

…この小説は、人物の感情の動きが中心となっており、展開が非常に速いです。…はい、言い訳です。ただ単に、私が未熟なだけです。…悔しい！と感じております。この思いをバネに、上達を目指しますぞ元就様ああああ！！

今回から、1話の内容が長くなります。それに伴い、視点も笑ってしまったり変わります。…平に、ご容赦を…。

## 菊の花と、露

…嬉しかった。弥三郎さんに褒められるのとは、少し違っていた。

「何ででしょうか？」

自問して、答えがかえってくるはずもない。

『好きなやつ』

弥三郎さんに言われて、真っ先に思い浮かんだのは…元就様、だった。

(好き？私は…あの方のことを、好いている？)

わからない。わからない。

父上は好き。屋敷の皆も好き。高松城の方達も好き。弥三郎さんも好き。

じゃあ…元就様は？

手の中にある、紅珊瑚の玉簪を見つめる。青白い月の光を反射する、紅い珊瑚。

『よく、似合っておる』

あの方の、無感情な声が反芻される。

どうして？どうして、こんなに気になるの？

会いたい。小菊に。

同じ城、同じ屋根の下におるというのに、おかしな話だ。

…いや、そもそも我が、他人と共にいたいと思うこと自体おかしいのか。

人の心。情。

いらぬ。そのようなもの。

それなのに、傍にいてほしいと望む。…我に、心あるゆえに。

捨て去ったと、思っていた。この氷の面を手にした、その時に。

「…苦しいわ」

燭台の火が、揺れる。頼りないその光が、まるで今の我のようで、

苛立つ。

あつてはならない。解つておる。  
…解つて、おるのだ…。

夢を見た。悲しい夢。

母上が、亡くなった日の夢。

大好きだった。私を、命を懸けて愛してくれた、世界で一番立派な女性。

そして、父上が生涯で、唯一愛した女性。

…私が、殺してしまった女性。

元就様。どこにいらっしやるのだろうか。

会いたい。今すぐに。

湧き上がってくる想い。あの方の隣にいればきっと、安心できる。  
でも、

「…駄目。駄目駄目駄目駄目…」

襖にかけて手を止める。

押さえつける。あの方に、ご迷惑をかけてしまつ。

甘えてはいけない。駄目なのだ。

私は、独りでいなくてはいけないのだ。

「…つう」

声を殺して、私は泣き始めた。

我の朝は、早い。

日が昇る前に起床し、身支度を整える。そして、闇を払い世界を照らす日輪が昇るのを、手を合わせて拝む。

今日も素晴らしい御来光。願うのは、毛利の繁栄と、安芸の平和。これからも変わることのない、我の願い。

『…笑つて、くださいませんか？』

小菊の願いは、そんなささやかなものだった。日輪の加護と、我

の日々の尽力で叶えられている私の願いに比べれば、あまりにちっぽけな願い。

小菊には、欲というものが無い。周囲の人間が、幸せでいてくれたらと望んでいる。

それは偽善などではなく、あの娘の心根がそうさせているのだから。

…我は、違う。我は、私の願いの為ならば、すべての者を犠牲にする。駒も、民も、我すらも。

小菊。そなたとて、例外ではない。例外など、ありはしない。

…そうならぬよう、手は尽くすが。

「…日輪よ。小菊にも…。あの、何も知らぬ無垢な娘にも、どうか加護を…」

願いが、増えてしまった。

まだ、眠っておるだろうか？

小菊の部屋。政務を始める前に、小菊の顔が見たくなったのだ。それはまあ、いいのだが…。

襖にかけた手を止めて、我は逡巡した。

眠っておるならば、声などかけたところで無意味。だが仮に、召し替えてもおったなら、断りなく入ることなどすべきではない。

「…小菊？入るぞ？」

返事は…あった。

「も、元就様？…だ、だめです！ぜつたい、だめです！」

駄目。絶対。小菊にしては珍しい、強い口調だった。

…気になるではないか！

「わかった。しばし待つゆえ、早く着替えよ」

待つのは好きではないが、仕方ない。

「！？きが…ちが、う…」

途切れがちに、小菊がそう言った。

(…着替えは、違う?)

「ならばなぜ、入ってはならぬのだ？」

様子が、おかしい。声がやけに小さく、くぐもっている。

「だめ…です…入っちゃ、だめ…」

…泣いて、おる…のか？

狼狽える。我は、何か小菊を悲しませるようなことでも、してしまつたのだろうか？

「…小菊、そなた、泣いておるのか？」

我が発する声は、それでもいつもの通りの。

「……………はい」

肯定。

「なぜ、だ？…我のせいか？」

小菊が高松城にやってきて、早数週間。恩人であり、我を恐れることなく接するこの娘が、快適に過ごすことができるよう配慮してきた。その、はずだった。

城の者達は、小菊を幼子のように可愛がっている。菓子を渡すところも、何度か見ている。

小菊も、城の者達を好いておると、言っておつた。それならば、

原因は、我にあるとしか思えぬ。

返答はなく、押し殺したような嗚咽が、かすかに聞こえてくる。

襖一枚。我と小菊を隔てる物は、あまりにも薄く、かつ厚かつた。

「……………」

入るなど言う。入らないで、ほしいと。

この場合の、最善は？小菊の言葉を無視して部屋に入るか、落ちて着くまで独りでいさせるのか…。

どうすれば、よいのだ？涙も凍りついた我には、どちらがよいのかわからぬ。接し方など…。

『我慢しなくても、いいんだよ』

脳裏に響いた声。これは、

『泣きたいなら、泣いていいよ。私は力になれないけど、隣にいることぐらいはできるから…ね？』

供とはぐれ、道に迷い、辺りが暗くなっていくとき、出会った我より若い女子。涙など見せられぬと、気を張っていた我に、優しく語りかけてきた。

結局、我は泣いた。自分より年が上の我が泣くのを、女子は呆れることも嘲いもせず、言葉どおり、ただ隣にいた。

光と熱を失った世界で、寄り添う女子の体温は、とてもあたたかかった。

憶えておる。はっきりと。

何も言わず、何も聞かず、ただ傍にいるだけ。それが、どれだけありがたかったか。

…そうだ。我は、誰より知っておった。

孤独を。独り泣く、寂しさを。

…小菊を、独りにはすまい。

この身体。まだ、冷え切ってはおらぬはずだ。

今度は、我が隣におろう。



菊の花と、露（後書き）

元就様の捨て駒である私（自称捨て駒）は、斬り捨てられても文句は言えない失態をしてしまいました…。戦国BASARA『宴』に付与されている投票権を巡り、アニキ派の妹との激しいバトルの末、敗れてしまいました…。！待ち受け欲しかったです…。！

このようならまらない後書きまで読んで下さった方、ありがとうございます！

涙の理由 ～幸福とは～（前書き）

…もう、言い訳すら思いつきません。このような超急展開の小説に付き合ったださる方、本当にありがとうございます…！どうかかして、手直ししなくては…！でも、時間が…！

…時間といえば、映画で半兵衛出てきませんでしたね。いや、映りはしましたけど、秀吉メインで小っちゃく映ってただけでした。台詞なしです。…予想はしてました。後書きで、映画のネタバレしますので、まだ観ていない方は読まないほうがよろしいかと思いません。

## 涙の理由　く幸福とはく

部屋の隅。膝を抱えて泣く、小菊の姿。

「……小菊」

隣に座る。

「……つも、もと、なりさま……」

大きな漆黒の瞳から、流れ落ちる透明な雫。頬を濡らし、着物を濡らし、畳を濡らすそれは、途切れることがない。

「……わ、わた……わたし、は……」

「よい。何も言うな」

言わなくてもいい。謝らなくていい。

「好きに泣け。私も、好きでここに……そなたの隣にいる。迷惑などと考える必要はない」

ああ。こんな口調では、伝わらぬな。

「……我慢など、せずともよい」

少し、躊躇しながらも、頭を撫でる。言葉で伝えられぬなら、態度で示そうぞ。

「……つもととなりさまっ！」

「……!?」

抱きついてきた。小菊が。

そうして、幼子のように、声を上げて泣き出した。

我は、黙って小菊の傍……本当に傍に、いる。

立場はあの時と逆だが、感じる温もりは変わらぬのだなと、目を細めた。

泣いた。声を抑えもせずに、感情のまま泣いた。

こんな風に泣けたのは、何時以来だろう。

悲しい。苦しい。そういう感情すべて。

ずっとずっと、吐き出したかった。でも、できなかつた。ずっと、

我慢していた。

誰の前でも、泣いたりしないよう。泣く資格なんて、私にはなかったから。

けれど、今、私は泣いている。

好きに泣け。迷惑などと、考える必要はない。我慢など、せずともよい。

そんなふうにも言ってもらえたのは、初めてだった。

泣いているだけの私。お忙しいはずなのに、あの方は傍にいてくれる。

そして、優しく頭を撫でてくれた。

堰が、切れた。

泣いていると、寒かった。独りでいたせいだろう。

耐えられなくて、優しい手の持ち主にしがみついた。とても、あたたかかった。

そのまま、涙が枯れるまで、泣き続けた。

言葉通り、あの方はずっと、隣にいてくれた。

…私が、母上を殺したのです。私を生んで母上は体調を崩され、床から起き上がることさえできなくなりました。

…その頃の私は、自分が原因だと知らなかったものですから、季節の花や小動物、綺麗な石など、外で手に入るものを母上にお見せしていました。母上は喜んで、私のことを褒めてくれました。

大好きだと、愛していると、やせ細った身体で私を抱きしめてくれた母上のことを、私は今でも憶えています。

…母上が亡くなったのは、五つのときでした。私はようやく、母上が私を生んだせいで亡くなったのだと知りました。

でも、誰も私を責めないのです。それどころか、私に悪くないと言つのです。そして、私が幸せになることが母上への供養になるのだから、幸せになりなさいと言つのです。

…どうやって、幸せになればいいのですか？私には、わかりませ

んでした。

母上が生きていた頃、何も知らない私は幸せでした。母上の健康と笑顔をお願い、そのために行動しました。母上が笑うと、父上も屋敷のみんなも笑って、私も笑いました。

母上が亡くなり、私は外に出なくなりました。出て、することがなくなってしまうのですから。

私はずっと泣いていました。そんな私を見て、父上や屋敷のみんなが辛そうな顔をするのです。…泣いてはいけないと、思いました。辛い顔なんて、見たくなかったから。

人前で泣くのをやめようと決めました。涙を止めて笑うのには、苦労しましたが。

私が、母上を奪ったのです。みんなに愛されていた母上を。私はその罪に、やっと気が付きました。

…苦しかったです。誰も私を責めずに、私の幸せを望むのです。みんなから幸せを奪った、私に。

せめて、私にできるのは、みんなの望むとおり幸せになることなのでしょう。私の幸せは、みんなが幸せでいてくれることです。

…そのためには、泣くことなんて、絶対にできなかつたのです。…私が泣くと、みんなを不幸にしてしまいますから。でも、泣くのを我慢するのは、なかなか辛いものです。

今日、母上が亡くなった日の夢を見ました。悲しくなって、元就様にお会いしようと思つたのですが、何とか思いとどまりました。

お会いしたら、涙を我慢できなくなりそうでしたから。だから、部屋で、独りで泣きました。

まさか、元就様がいらつしやるとは思いませんでした。…いえ？嬉しかったですよ？けれど、やっぱり涙が止まらなかつたので…。

え？よかつた？何がです、元就様？

これは安堵、だろうか。

幸せにならなくてはならない。他者の幸せが己の幸せである。そ

のために、他者に甘えられない、迷惑などがかけられない。

涙など、絶対に見せられない。

なんとも、小菊らしい。

我がなにかしたのではないかと思ひ悩んだのが、馬鹿みたいではないか。

「…そなた、我の思つた以上に変わった娘だ」

「…？」

抱きついていた小菊が、顔を上げる。泣き腫らした目は赤く、しかしすつきりとした表情だった。

「そなたの心根は、我の考えが至らぬほど真つ直ぐだったのだな」

「…？」

首を傾げる小菊。その背に腕を回し、我は呟く。

「…だからこそ、惹かれたのやもしれぬな…」

「え…？」

我の言葉の意味を理解する前に、抱き寄せ、呟きを漏らしたその口を塞ぐ。

我の、口で。

口付けされたのは、生まれてはじめてで。

しかも、お相手は元就様で。

私の思考は、止まった。

数瞬が、永遠に感じられた。

「…抵抗するなり、応えるなりすればよいのに…そなた、そんなことではほかの男に襲われるぞ？」

にいと、間近で浮かべられる笑み。

あ、そんな表情初めてみました。嬉しいです。…ではなくって！

「もっ！元就様！？今、今、何を…！？」

今頃になって、顔が赤くなる。

「…何を、とは？我がそなたに口付けた。それだけのことよ」

（それだけ！？元就様からすれば戯れなのでしょうが、私にとって

は……！)

無表情に戻った元就様のお顔が、心なしか曇る。

「嫌であったか？……我では」

「……………嫌じゃなかったです。でも、その……初めて、だったので

……」

(ああもう！……嫌じゃないけど、恥ずかしいのです……！)

こんなこと、言わせないでほしい……。羞恥心で俯く私に、投げられたとんでもないお言葉。

「……ならば、こういうのも初めてか？」

「……！」

押し倒される。さっきまでの体勢も、冷静になってみれば大問題だが、これは拙い。

それはもう、とんでもない状況だ。

(こういうの？え？何をされるおつもりですか？)

……決まっている。この体勢で、男の方と女の方がすることなんて、ひとつしかない。

のしかかってくる元就様の口の端が、少し吊り上がっている。

「小菊……覚悟は、よいか？」

(よくないです！本当に、よくないです！)

思っても、身体は金縛り状態で、動くことはおろか声すら出せない。

(誰か！誰でもいいのでどうか助けてください！)

毛利の御家を守るが、我が使命。家を絶やさぬ為に、子を為すのも我が使命。

これまでは、どこかの領主の娘でも嫁にもらえばよいと思っておった。他勢力との結びつきと、後継ぎが得られればどんな女でもよい。

だが、今の我に、そんな選択肢はない。

小菊と。この娘以外の女など、考えられぬ。

…だから、さきほど申しただであろっ？抵抗か、順応かと。

安心するがよい。口付け程度で動じる生娘に、無理強いはせぬ。

…今日のところは、だがな。



涙の理由　く幸福とはく（後書き）

映画のブルーレイを購入しました。観ました。…絶叫しましたよ、まどろみは。もうね、大興奮です。「三成いいいいいいいい！！もう可愛いすぎるだろおおおお！！」「刑部うううううううう！！死ぬな！死ぬんじゃない！」「元就様ああああああ！！！素敵ですうううううう！！」「浅井夫婦来たあ！あもつ観られてよかつたあ！」「…あれ？瀬戸内は信長戦に参加しないの？」「…悔いなどないよ！観られて幸せでしたあ！」

…気持ち悪い？うんまあ、そうでしょうね。しかし滾った！

BASARAで恋愛ゲーム出ないかな…予約して買いにいけますよ！全国のBASARAファンが発狂しますね、間違いなく。妄想しただけで死にそうになるのですから、ボイスで確実に死にます。

…出ないかなあ。

…まどろみ猫の、こんな下らない後書きにまで付き合ってください、ありがとうございました！

## 駒の会話(前書き)

お久しぶりです、まどろみ猫です！数日ぶりの更新です。書きた  
いものがありすぎて大変です。

元就様、愛しております！どうか、幸せになってくださいませ！

## 駒の会話

「……はあ」

文机に肘をついて、私はため息をついた。

開かれた書物。いつもの私ならとつくに読破しているはずのそれを、閉じる。

目で字を追っても、まったく頭に入っていないのだ。…原因は、そう。

『惹かれたのやもしれぬな』

『抵抗するなり、応えるなりすればよいのに…そなた、そんなことではほかの男に襲われるぞ？』

『…ならば、こういうのも始めてか？』

元就様の、お戯れのせい。

数日経った今でも、思い返すと赤面してしまう。

(いえ、元就様のことは好きですよ？でも、これが恋愛感情なのかは…)

初恋もまだの私には、わからない。何もかも、初めてだ。

口付けも、押し倒されたのも…。

かあつと顔が熱を帯びる。や、やっぱり私には、まだ早い。

もつしばらく、子供でいたい。でも…。

「…私には、魅力が足りないのでしょうか…？」

『冗談ぞ』

そうおっしゃって、身体を離れた元就様。

(いえ、続けられても困るのですが…！冗談と言われてしまつと…) 見た目が幼いのは、自覚している。背だつて、小さい。

こんな私を、普通の男の人は、抱く気にならないだろう。

(いえ、ですから別に抱かれたいわけじゃなくつて…！もつ、もつちやごちやです…！)

知恵熱が出そうになる。

…知りたいことは、一つだけなのに。

(元就様…あなた様にとって私は、一体なんなのですか?)

「小菊様。元就様が、お呼びですよ」

「…っ！わかり、ました…」

女中さんに返答して、書物を片付ける。

どうしよう?どうしようどうしよう!?

あの日以来、ろくに顔をあわせられない。ましてや、会話なんてもつとできそうにない。

(ああ、本当にどうしましょう!?)

…軽率な行動だった。反省しておる。

二度とせぬから、そろそろ我を避けるのをやめよ。

口付け…まではよかったのだろつ。小菊自身、嫌ではないと言っておった。

しかし、頬を染め恥じらう小菊を前にして、自制がきかなくなつたのだ。

もつと、驚かせてやろつ。もつと、困らせてやろつ。

小菊の慌てふためく姿が、見たくなつた。押し倒し、あの娘が我のこののみしか考えられぬようにした。

固まつた小菊。よほど、驚いたのだろつ。一言も発しなかつた。

覚悟はよいかと尋ねると、泣きだしそうな顔をしたので、『冗談ぞ』と誤魔化した。

…戯れなどではなかつた。だが、小菊を傷つけてまで、想いを遂げようとは思わなかつたのだ。

あの心根の優しい娘が、他者の幸福を望み、他者があの娘の幸福を望んだように。

我も小菊には、笑っていてほしいのだ。

「元就様、最近お変わりになられたと思わないか?」

小休止。政務を一段落させ、自室におらぬ小菊を捜していた我は、そんな言葉を耳にした。

「ああ！…なんていうか、無表情だけどこか優しげになられた気がする！」

漏れ聞こえてきたのは、駒共の会話か。気まぐれに、耳を傾ける。「やはり…小菊殿の、おかげだろうか？」

「そうだろ！あの子と元就様と一緒にいるところ、見たことあるか？元就様、今まで見たことがないくらい和らいだ表情だったぞ！？」  
「いやああれにはたまげたねと、軽い口調の駒。」

「…想像すらできないな。夢でも見ていたんじゃないか？」  
真面目そうな、駒。

「いや、俺も見たぞ。驚きすぎて、狐狸妖怪の類が化けているのではないかと疑ってしまったくらいだ」

男にしては、少し高い声の駒。…三人の駒が集まって、話をして  
いるようだ。

「おいおい、言い過ぎだろ。元就様も男だ、女の前じゃ違う顔を見せるさ。…意外だけどな」

女に興味なんて、微塵も示されなかつたのになと、軽い口調の男が言う。

「あゝ…確かに。『女など、世継ぎを得るために娶るにすぎぬ』とかおっしゃいそうだもんな」

「…しかし、小菊殿は『女』というよりまだ『娘』なのでは？…妹のように思っておられるのではないか？」

真面目そうな駒の考えを、  
「「いや、絶対ない」」

と、全否定する駒二人。

「あの空気は完璧に、想いあつてる恋人同士の空気だったね！…第三者なんて、存在してないみたいな」

「ほんつと、お前は色恋沙汰に疎いよなあ…そんなんで、大丈夫か？」

「優しく肩を叩くな！大丈夫だ！………多分」  
声の高い駒に同情されたらしい真面目な駒が、ぼそりと付け足した。

廊下で立ち聞きしている我はというと、『想いあっている恋人同士』という言葉が脳内をぐるぐる回っていた。

想いあっているということは、我が小菊を想っただけでなく小菊も我を想っているということだな！？そのように見えたのだな駒よ！それならば、やはり問題などないではないか！そうと決まれば小菊と祝言を…。

「…だが、元就様は大丈夫だろうか？」

真面目な駒の真剣な声に、我は歩み出した足を止めた。

…何か、案じられることでもあるのか？

「ん？何がだ？」

「…忘れたのか？元就様は、あのお方は…」

続けられた、駒の言葉は…。

「小菊…そなたには、死んでもらう」

喉元に突きつけられた、巨大な輪の刀。

「……………」

冷たく輝く鋼。この方が動かせば、私の首は落ちる。

ここは、元就様のお部屋。呼び出された私は、元就様に突然そう言われたのにもかかわらず、ひどく落ち着いていた。

元々殺される覚悟で、このお城に来たのだ。ここで過ごした数週間も、いい思い出になっている。

私の命は、この方の掌の上にあったのだから。

「…なぜ、何も言わぬ！？なぜ、それも落ち着いておる！？」

端正なお顔が歪み、苦悶を形作ったのを見て、私は驚いた。

「…命乞いをせぬのか！？我を見るその目は、何故そうも穏やかなのだ！？」

元就様は、血を吐くように言葉を投げる。何故、何故と。

「っ！」

叫んだせいで、あの方の腕が少し動き、私の喉に浅い傷をつけた。痛みと、血が流れるのを感じた。

「!?!」

はっとしたように、元就様はわずかに手を引いた。

喉元に、白刃はない。そっと傷に触れると、生ぬるい血が指に付いた。

「こ、小菊…我は、我は…」

怯える子供。私と己の武器を交互に見つめる元就様に、いつもの冷静さは失われている。

「…元就様」

様子が、明らかにおかしい。ご乱心、というわけでもなさそうだが、覚悟を決めても、死への恐怖はある。あつたが、それはどこかへ行ってしまった。

今の私にあるのは、この方を安心させてあげたいという思いだけ。

## 駒の会話（後書き）

クリスマス。：仕事を終えて遅くに帰って寝る。それが、予定で  
す。

リア充である我が友へ！：未永く爆発しろ！応援しています！相  
談は受けるけど、のろけは結構！また充電が切れる！

読んで下さった方、ありがとうございました！



心と、想い　く消せぬもの　(前書き)

…後悔？一切ないです！

小菊ちゃん！元就様！幸せになってください！駒が祝福いたしま  
すぞー！！

心と、想い　く消せぬもの

赤。見慣れた、鮮やかな色彩。

小菊の白い喉から、一筋の赤が流れ出る。

「!？」

はっとし、我はわずかに輪刀を引く。

小菊は落ち着きはらって、自身の喉元に手をやる。

「こ、小菊…我は、我は…」

穏やかな瞳を向けてくる小菊。狼狽える、我。

なぜ、なぜ我がこも揺らく!?いつものように、使えぬ駒を斬り捨てるときのように、すればよいのに!

いつもと異なっているのは、小菊の眼差し。駒達の目には、我と死に対する恐怖しか映っておらなんだ。

それなのに、それなのにこの娘の目にはそれがない。どこまでも静かで穏やかな、漆黒の瞳。

止せ!止めよ!そのような目で我を見るな!我は、そなたを殺すと決めたのだ!

「元就様…」

近づいてくる、小さな娘。非力な、武器も持たぬその娘に、我は知らずのうちに後ずさっていた。

我が手にある、輪刀。振れば、瞬く間に終わるといふに。

我は、振れなかった。

「…大丈夫です。大丈夫ですから…」

小さな娘が、小菊が、我を抱きしめた。小さくあたたかいその娘は、ただ大丈夫だと繰り返した。

花のような、甘く優しい香りがした。

「…元就様、大丈夫ですよ…落ち着くまで、私が傍にいますから…」  
背を、私の背を、幼子をあやすかのように優しくたたく。

我の手から、輪刀が滑り落ちる。

瞬間、我は悟った。いや、小菊に刃を向けた時点で、すでに悟っていたのやもしれぬ。

殺せぬ。我にはもう、この娘を殺せぬのだと。

小菊は、何も訊かなんだ。

ただ我に、温もりと安らぎを与えるのみ。

できぬ。できぬ。この娘を、殺せぬ。

殺めたくない。失いたくない。

ずっと、傍にいて欲しい。

…遅すぎた。気付くのが。

もう、戻れぬ。

我は、そなたを傷つけたのだから。

泣かないで。独りぼつちで、泣かないで。

何のお役にも立てないけれど、傍にいらることぐらいはできるから。数週間だけど、一緒にいてわかった。

この方の心は、凍についてなどいない。この方は、人なのだ。

あまりにも賢く、孤独な、人。

他者を寄せ付けまいとする。使えぬ者は、容赦なく斬り捨てる。すべては、己の守りたいものの為に。

…元就様、それで、あなたは幸せですか？守りきったその先が、自分独りだけでも、幸せだと言いつ切れませんか？

私は、悲しいです。うまく表現できませんが、そんなあなた様が、ひどく悲しいのです。

私のような小娘が、あなた様を理解できるはずがありません。それも、わかっています。

…ですが、それでも私は…。

我は、どうしたのだ？

目が熱い。何かが溢れて止まらぬ。

何だ、これは？

胸が、痛い。傷を負ったわけでもないのに。

辛い。苦しい。

…まこと、感情とは厄介よ。いつまでも、我がどれだけ忌み嫌おうとも、我の中にあるのだから。

小菊。小菊。弱く小さく、そして強い娘よ。

すまぬ。すまぬ。

驚いただろう、恐ろしかっただろう、…痛かっただろう。

それでも、愛しいそなたを傷つけてでも…我には、守るものがあるのだ。

俺は、心配だった。

海を挟んだ安芸の国の方を見て、出会った小さな娘に思いを馳せる。

野郎共の報告によると、小菊という娘と毛利の野郎は、仲良くやっているらしい。

それを聞いて、余計に気になった。

俺が、ここまで真剣に心配しているのは、小菊の命だ。

毛利の野郎は、異常なまでに御家に固執していやがる。ヤツにとつては、御家を守ることが自身の存在意義なんだろう。

だからといって、部下を駒扱いするってえのは納得できねえが。

寂しいヤツ。心を許せるやつが、一人もいねえ。そんなあの野郎に、守りたい女ができたら？

思い出したのは、ダチの慶次。あいつは、昔豊臣の猿とダチだったらしい。

袂を分かった理由。酒の席で、酔った慶次が漏らした言葉。

『あいつは…秀吉は、ねねを殺したんだ。自分が一番愛していた人を、その手で…』

『…！？なんでだ！？てめえが心底惚れた女だったんだろ！？』

『…力が、必要だったんだってさ。そしてねねは、秀吉自身が深く

愛していたから…秀吉の、一番の弱点になっ…てしまっ…た。…それで…それだけの、理由で…！」

『慶次…』

杯を握りしめ、目を伏せた慶次。あいつは、殺されたねえって女に惚れてたようだ。

俺には、できねえ。自分の立場はわかってる。

俺には、守るもんがある。長曾我部の家、領地、領民、可愛い子分共…。挙げたらきりが無い。

強くなった。姫若子と呼ばれていた、あの頃の俺はいない。

守るものが、守りたいものがあつたから。力を求めて。

いつか、俺に、女ができたなら…弱点になるなんて言っ…て、殺せるだろうか？守るために強くなった、この手で？

…そんなこと、できるわけねえだろうが！

俺は絶対にそんな真似はしねえぞ！

海賊であるこの俺の宝、奪えるもんなら奪っ…てみやがれ！

…だが、これは俺の考え。俺と毛利の野郎は真逆。

単純に考えると、毛利の野郎は、小菊を…。

殺そうと、するかもしれねえ。豊臣の猿みてえに。

『感情など不要』

冷たく言い捨てた、あの野郎。

てめえは、本当に心っ…てもんを捨てちまつたのか？それなら、愛情なんてもんもねえはずだ。

本当に、心を捨てたなら。あの野郎の心が、完全に凍…てついでいるってんなら。

こんな心配、する必要もねえ…ってんのに！

くそっ！俺にできることなんて、ねえじゃねえか！

「小菊。我には、守らねばならぬものがあるのだ」

「存じております。毛利の御家と、安芸の安寧ですね？」

我の目元。そっ…と指で拭…つて、小菊は微笑む。

心安らぐその微笑みと、喉につけられた浅い傷。

見つめていたい。見たくない。

「そうよ。我はこれまで、それらを守るためにあらゆるものを犠牲にした。策を練り、駒を動かし、障害となるものを排除した」

…目を、背けてはならぬ。

小菊は、我の話を聞いている。

「そのために、我は心を捨てる必要があった。敵はもちろん、兵や民草を思つて戦などできぬ。迷いが、生まれる。情けなど、戦場で邪魔となるだけでしかない」

畳の上に転がる、輪刀。どれだけの血を吸つてきたのか、わかりはしない。

「我が道行きは、間違つてなどおらぬ。後悔など、するつもりもない。…これまでは、それですべてがうまくいっておつたのだ」

すべてが、我の掌の上で。

「…我が変わつたのは、そなたと共にいるようになったからだ。そなたといると、捨て去つたはずの心が戻ってくる。些細なことで、揺れ動く」

我を見上げる小菊の目が、見開かれた。

「我は…そなたに、惹かれておつたのだ。しかしそれを、認めることはできぬ。恋慕の情があるということは、我に心があるという、これ以上ない証明となるゆえ」

それでも、いくら否定しても、想つてしまう。小菊のことを。

「それでは、ならぬのだ…心在つては、我に御家を、国を守ることはできぬ。それゆえ、我は、そなたを…」

殺そうとした。殺してしまえば、二度と笑顔など見ることはない。

また、氷の面を被ることができる。御家を、守れる。

だが、結局はこの有様。小菊を殺めることはできず、我は抱きしめられたまま、つらつらと自らの心中を吐露している。

情けない。このような姿、小菊以外の者には決して見せられぬ。

「…元就様は、私のことを、好いてくださっているのですか？」

視線が、ぶつかる。小菊は、物怖じすることなく、我を見つめる。我は、眉をひそめた。…何を言っておるのだ、この娘は？

先日口付けたときも、今しがたも、はっきり言ったであろうが。そなたに、惹かれたと。

小菊は、期待するような、熱のこもった視線を我に送り続けている。

「…好いておる。そなたを、誰よりも好いている」

考えるまでもない。想いが、勝手に口をつく。

「そなたと、死ぬまで添い遂げたい」

…これが、我の本音か。

元就様のお話は、聞いていて胸が締め付けられた。

どうして？どうして、そんなにも自分を顧みずにいられるの？

御家と御国のため。あなた様はお独りで、そんなにも苦しんでこられたのですか。

私に、私なんかに、何かできることはあるのでしょうか？

信じられなかった。私が、私なんかが、この方の心を動かした？

そしてこの方は、守るもののために私を殺そうとした？それが、心あるがゆえにできずに、あれほどまでに動揺した？

「…元就様は、私のことを、好いてくださっているのですか？」

私への想い。もしあるのならば、はっきりとした言葉で。

惹かれたなんて、曖昧な言葉じゃなくて。

何を言っておるのだと言わんばかりに、ひそめられる眉。

私はじっと、元就様を見つめる。今更ながらに、心拍が上昇する。でも、そんなことはどうでもいい。大切なことは、たった一つ。

「…好いておる。そなたを、誰よりも好いている」

紡がれる、言葉。

「そなたと、死ぬまで添い遂げたい」

至近距離から降ってきたその言葉。すっと、私の中に入ってく

る。

理解した。…そうだ。

私も、この方が好きなのだ。誰よりも、愛しているのだ。

「私もです。…元就様を、愛しています」



心と、想い　く消せぬもの　く（後書き）

Wordで書き溜めて、読み直して、表現がおかしかったり話に繋がりがなければ修正する。大丈夫だと思ったら投稿です。まどろみは『天に輝く日輪の如く』以外にもたくさん書いています。小菊ちゃんと元就様の話がある程度まとまり、オリジナルキャラであるあの忍びが登場したら別で投稿したいと思います。…ツンデレって萌える！

…まどろみは元就様の駒ですが、BASARAのキャラは全員好きです！

どうかこれからも、お付き合いください！読んで下さり、ありがとうございました！

日輪の御前で溶けぬものなし(前書き)

出会いから想いが通じるまで…13話!?短いですね。

二人とも愛しています。ので、これから末永くお幸せに!

今回、新キャラ登場です!オリジナルキャラも出てきます!これからも、続きますのでよろしかったらお付き合いください。

## 日輪の御前で溶けぬものなし

…あい？藍？哀？…愛！？

「あ…愛している？そなたが、我を？」

こくりと、小菊が頷いた。頬が、朱に染まっている。

「ま、まことか！？」

初心な小菊には、精一杯の告白だったのだろう。潤んだ瞳が、我を見上げている。

「…嘘など、つくはずがありません」

我はこのとき、どのような表情をしていただろうか。

氷の面は、小菊という小さな日輪に、跡形もなく溶かされてしまった。

小さな日輪。我の心を、あたためてくれる。

「小菊！」

幼き頃に亡くした、母のように。優しく我を抱きしめている娘。

「…その言葉がまことなら…我を、この我を…！」

両手で、その小さく華奢な身体を掻き抱く。力を込めて苦しませてはならないと思うが、『感情』が溢れて上手くできない。

「…もと、なりさま…？」

腕の中の小菊。痛いだろうに我を思っただか、それをおくびにも出さない。

「見捨てないでくれ…見限らないでくれ…！」

健気な娘。愛おしくて、たまらぬ。

「…ずっと、傍にいてくれ…！」

離さぬ。そなたは、誰にも渡さぬ。

どうか、我だけの日輪でいてくれ。

「はい…私でよろしければ、いつまでもお傍に…」

きゅっと、我の着物を掴む小菊。我の、そう厚くない胸板に、すがるように。

「愛している、小菊」

こんな言葉では、足りぬくらいに。

「俺様さあ、あんたのこと嫌いなんだよね」

飄々とした忍び。彼は、軽い口調で言った。

「…あんたさあ、いつまで騙し続けるつもり？いつまで、逃げ続けるつもり？」

主の命で私を見送る彼の目は、冷たい。

「……………っ！」

突き刺さる。冷たい視線と、言葉。

「余計なお世話だろうけど、今のあんたじゃその大事な大事なお姫様、守れないよ？」

小馬鹿にしたように言われ、かっとなった。

「…だって！言えるわけじゃないじゃない！」

だんつと強く枝を蹴る。葉が散るのを見ることなどなく、すぐさま次の枝へと跳ぶ。

「…ホントは、わかってるんだろ？」

唇を噛む。どうして、わかるのか。

私が、わかっていることを。

「じゃあな。…『燕』こと、『小雀』さん？」

「…見送りありがとう。あなたのおかげで、決心できたわ」

甲斐の国の国境付近。木に寄りかかって腕組みしている彼の目が、わずかに見開かれた。

「…何々？マジで言うの？」

マジもマジ。大マジですよ。

「ええ！嫌われたらとか、怖がられたらとか考えるのは、もうやめたの。姫様の為って誤魔化すのもね」

お優しい姫様に、謝らないと。…嘘を吐いてて、ごめんなさいって。

彼が、笑った。今さっきまで見せていた、冷たさはない。

明るい笑顔。…彼が忍びでなかったら、いつでも見られただろうに。

「姫様は私を生かしてくれた…私はそのご恩に報いたい。今のままじゃ、あなたが言う通りダメなの」

甲斐に来て、本当によかった。虎の師弟の熱い殴り愛、じゃなかった殴り合いも見られたし、この冷たいようでいて優しい忍びに出会えた。

「ありがとう、佐助！また、会いましょう！」

「ああ！頑張れよ！」

手を振る私と、振り返す佐助。

私が嫌いなんじゃないかなかったのと思いながら、背を向けて駆けだす。

「…連絡、待ってるぜ〜！」

投げかけられた言葉。…まったく、

あなたも、忍びなのに心があるのね！

「甘味は、よいな」

小さな口を動かし、私の隣で饅頭を咀嚼している小菊。

「…はい！元就様も、甘いものが好きなのですね！」

嚙下して、我になっこりと微笑む小菊。

「甘味も好きだが…そなたが、一番好きだぞ」

思ったことを、そのまま口に出す。こうして、はっきり言えばよいのだ。

「…私も、元就様が一番好きです！」

そうすれば…小菊も、応えてくれるのだから。

我はもう…独りではない。

元就様は、私を殺そうとしたことを、謝ってくださいました。でも、私は全然気にしていませんよ？

今、こうしてお傍にいられるだけで、幸せなのです。幸せすぎて、

怖いくらいです。

『…毛利の御家を守る為ならば、我は、きつとそなたを見殺しにする…それでも、我の隣にいてくれるか？』

差し出された、元就様の手。私は、迷うことなくその手を取った。あの方の、嬉しそうで悲しそうな顔は、一生忘れられない。

人を殺すのが罪ならば、私もその罪を背負いましょう。あなたの痛みを、少しでも分けてください。

あなたはもう、独りではありませんから。地獄の先だろうと、お供しますよ？

日輪の光あらばこそ、月は美しく輝く。柔らかく冷たい月光も、我は好む。

(小菊が日輪ならば…我は、月輪か?)

ふと、そんなことを考えた。…それは、ならぬな。

出会うことなく。交互に、天を照らし続けるなどと。

耐えられない。我は、そうも強くない。

何人も指一本触れられぬ存在。どこまでも高く、見えているのに遠い。

手を伸ばしても、届くことなどない。全てを照らす光には。

小菊のおかげで取り戻した心。だからこそ解る。

我は、寂しかったのだ。唯一の拠り所である日輪には、触れることさえ叶わない。

(日輪は決して触れられぬが…小菊には、触れられる)

拳を固める。この手に、ようやく掴んだもの。

守りきってみせよう。御家も、中国も、小菊も。

我の、血に濡れたこの手で。

佐助と別れ、甲斐を出て数日。

私は、約一月ぶりに安芸の国へと戻ってきた。…姫様！帰ってきましたよ！

たたたたたと、軽快に駆ける。実戦から遠のいたとはいえ、鳥の中で最も速い『燕』の名を冠していた私は、常人とは比べものにならない速度で走ることができる。

のどかな村。その外れに、私の恩人である姫様と、御父上様のお屋敷がある。

「小雀、ただいま帰りましたあ！」

見張りもない門をくぐって、大きな声で叫んでしまった。早く、姫様にお会いしたい。

大きくはなく、質素な武家屋敷。このお屋敷が、私の『家』だった。『小雀ちゃん！？』

慌てた様子で、女中のお佳代さんが飛び出してきた。初老の、ふくよかな女性だ。…怒ると、怖い。

「あっ！お佳代さん、お帰りなさい！」

一月振りですね」と笑う私を見て、お佳代さんの顔が歪んだ。

「…大変なんだよ！小菊様が！」

泣き出しそうなその声を、聞いた瞬間。

私は、弾かれたように駆けだしていた。

…姫様の、お部屋へと。

高松城のお庭にある桜の花も、とつくに散ってしまいました。

…時が経つのは早いもので、私が高松城で暮らし始めて一月。戦もなく、今日も安芸の国は平和です。

元就様は、やっぱりすごい方です。この国のみならず、中国地方を統べていらつしやるのですから！

…ですが、お忙しくてなかなかお会いできません。寂しいですけど、お待ちしていますね。

『小菊、何か望みがあれば遠慮なく申せ。我が、どんな願いも叶えよう』

…笑顔で、そうおっしゃった元就様。私が最初にお願ひしたことは、叶えていただきました。

ちゃんと、笑えましたね、元就様。…とつても、素敵です。

『望み、ですか?…ありすぎて、元就様がお困りになりますよ?』  
望み。願い。元就様と出会った今では、ありすぎて。

『構わぬ。そなたの望みを叶えて、そなたの笑顔が見たいのだ』

真顔でそんなこと、おっしゃらないでください…恥ずかしいですよ…。

「…ご迷惑に、ならないように…」

気にするなと、元就様はおっしゃってくださいるだろうけど。

あの方には、大事なお役目があるのだから…ってあれ?

御家を守るということは、次の世代に引き継ぐということですよ  
ね? 次の世代ということは、つまり…。

ち、ちがつ…違わないですよね!?! つまりその、元就様が私と…  
私が、元就様と…!?!

…元就様は、小雀ちゃんみたいに大きな胸のほづが、お好み  
でしょうか…?

うう…小雀ちゃん、どうしたらそんなに大きくなったのですか?  
教えてください。

十年早いかもしれませんが、元就様を、その…がっかりさせたく  
ないのです!



日輪の御前で溶けぬものなし（後書き）

御家を守る〃世継ぎは当然ですよね。そして、言っておきたいことが一つあります…元就様は幼女趣味じゃない！アニキ、勘違いしないように！

小雀ちゃんは、必要性に迫られたのと単純にくノ一が萌えるので誕生したキャラクターです。可愛いです小雀ちゃんも！

…自信がなくなってきましたが、まどろみは雌です。こんな変態の作品に付き合ってください、ありがとございました！

小雀の記憶　くあるくノ一の過去く（前書き）

前回までが書き溜めていたお話です。ですので今回から、更新が遅れます。ポケットモンスター　くお嬢様とレックウザくとの連立は、無謀だったかもしれません…でも、負けませんよ！頑張ります！

小雀ちゃんです。書いて辛かったのは、彼女がどれだけ小菊ちゃんのことを思っているか考えたからでしょうね。

一日クオリティですが、どうぞお読みください！

## 小雀の記憶　くあるくノ一の過去

…お部屋は、空っぽだった。

「…姫様…？」

ふらふらと、定まらない足元。先程まで駆けまわっていたのが嘘のように、まるで力が入らない。

綺麗に掃除されているけれど、このお部屋からは、人が住んでい  
る形跡が感じられない。

「…姫様…姫様…」

ふらつきながら、歩きだす。…縁側に、いらっしやるかもしれない。  
い。

姫様は、よくお庭を眺めておられたから。そうだ、きっとそう。

きっと、いらっしやる。そして、私に「お帰りなさい」って言う  
てくださるの。

出会って五年。変わることはない、優しい笑顔で。

縁側の人影は、姫様ではなかった。

「…威三郎様…」

いらっしやったのは、姫様の御父上様。

柱にすがりつくようにして、立っている私。ちゃんとしなくては  
と思うが、身体に力が入らない。

「…小雀か？」

ゆっくりと、振り向かれた威三郎様。その、お顔を見た瞬間に、

「う…わああああああああん…！」

切れた。何かが、私の中で。

出発の日に見た威三郎様とは、別人のよう。お皺と共に刻まれて  
いる、深い悲しみの色が、私に現実を叩きつけた。

「ひっ…姫様は…？姫様は、どこにっ！？いないの！？どうして！  
？」

泣きながら、威三郎様を問い質す。形振りも礼儀も、構っていない。

「…小雀よ、いい子だから、落ち着け…」

子供みたいに、頭を撫でられる。それでも涙は止まることなく、むしろますます溢れてくる。

…姫様だった。こうして、威三郎様に撫でられるのは。

『…父上、子供扱いはやめてください』

ぶすつとした顔でそう言いながらも、姫様は嬉しそうだった。そんな姫様を見て、威三郎様はまだまだ子供だと言って笑っていた。

なのに、なのになのにそれなのにつ！

ぎりり…強く噛んだ唇から、血が流れる。不快な鉄の味が、口の中いっぱい広がる。

それでも、私は噛む力を弱めない。そうしていないと、今にも叫び出してしまいそうだった。

「…小菊は、死んではおらん」

「!?!」

勢いよく、顔を上げる。私の顎から滴る赤に、驚かれた様子の威三郎様だったが、

「小雀、お前が旅立って数日後に、あるお方から文が届いてな…」  
すべてを、お話してくれた。

私と一緒に、泣きながら。

いい気味だ。雇い主が討たれたと聞いて、そう思った私への罰だろうか。

「…つば、め様…我等、忍び全員…」

報告の途中で、事切れた部下。背中に突き刺さっている、無数の手裏剣や苦無。

「…っ青!? しっかりしなさい!」

抱き起こすも、その心臓は鼓動を止めている。

…彼は、眠りについてしまった。永久の、眠りに。

彼だけじゃない。他の部下達も。

……私を、残して。

炎上する城。討たれた馬鹿殿も、その娘である傲慢姫も、どうでもよかった。

悲鳴、怒号、断末魔。聞き慣れたそれらも、私の意識を現実へと引き戻しはしない。

「痛いよ……みんな……」

心が、どうしようもなく痛かった。命令で人を殺しても、痛むことなどなかったのに。

部下達の顔が、脳裏に次々と現れては消えていく。忍びだったけど、モノみたいな私達だったけど、一生懸命生きていた。

忍びに、心は要らない。忍びの里で、最初に教えられた。ただ『モノ』として、雇い主の命令をこなせばいいと。

……私は、忍び失格だ。部下達の死に動揺して、警戒を怠ってしまった。

「……つつあ!？」

殺気。感じた時には遅く、背中に激痛が走る。皮膚が裂け、血が噴き出す。

「……『燕』」

一方的な虐殺。それが、今夜起こったこと。

膝をついた私を囲む、忍び達。彼らは各々、静かに武器を構えて包囲を狭めてくる。

「……あなた達なの……?」

忘れた。仲間を失った痛みも、背中に刺さった苦無の痛みも。

敵の、血を滴らせる得物。その血は、おそらく……。

「……青を、私の仲間を殺したのは……あなた達なのっ!？」  
全身を巡る、どす黒い感情。

「……仲間?おかしなことを言う」

ええ。おかしいでしょうね。

「我等は忍びだ。忍びに、仲間などいない」

そうね。そんな認識、『忍び』じゃないわね。

「…だが、お前の部下を屠ったのは我等だ」

……………そう。

ゆらりと、立ち上がる。背中が焼けるみたいに熱い。

でも、それ以上の業火が、私の腹の底で渦巻く。

「…やめておけ。手負いの貴様に、勝ち目などない」

…何よその目は。哀れんでるの？

「うるさいわよ！！あなた達全員、許さないから！！」

爆発する。こいつらに、みんなと同じ痛みを味わわせる。

…それだけじゃ足りない。でも、私のこの痛みは、こいつらにはわからない。

生まれて、初めて。

私は、自分の『意思』で人を殺した。

「…はあ…はあ…はあ…」

足が、身体が、重い。

私は、逃げていた。焼け落ちた城は遠く、それでも放たれた火は世界を橙色に照らす。

旅人の変装。忍び装束に比べれば、動きにくくてしょうがないけれど、あの格好では敵の目についてしまう。

新たに負った傷口から流れ出る血が、体力を奪い体温を低下させる。痛覚はとつくに麻痺して、寒さだけがある。

…今、真夏なのになあ…

いよいよ拙い。寒気だけでなく、眠気までしてきた。

必死で動かす足。あと、どれだけ動かせるのか。

何もわからずに、私は遮二無二走り続ける。

この道は、どこに続いているのか。これからどうするか。  
何一つ、わからずに。

うつすらと目を開くと、天井。あれ私いつものように木の上で寝

たんじゃなかったのと、身体を起こそうとして…悲鳴を上げた。

「いったあ!？」

全身が痛い。何で？

「起きちゃだめですよ！傷口が開いたら大変です!」

……誰？見たことのない可愛い子が、いるんですけど。

というか、ここどこ？お城じゃないよね？

「あの…私…？」

何を訊けばいいのか。混乱していると、

「お姉さん、大怪我してお庭の木の上で気絶していたのですよ。…

旅人さん、ですよね？野盗にでも…？」

十歳くらいだろうか。女の子が、訊きづらそうに尋ねてくる。

大怪我?…どうりで、全身痛いわけだ。旅人?…違う、それは変

装。野盗?違う、この怪我は…私は…。

「…っ!」

そうだ。昨夜、城が急襲されて、それで…。

「…思い出した…」

雇い主で城主の馬鹿殿が討たれて、城のあちこちに配置した部下

が全滅して…。

「私…私は…」

怒りに駆られて、敵の忍びを残さず殲滅して。

「………みんな、死んじゃった…」

ひたすらに、道もわからずに走って。その後のことはもう…。

「…あ」

幼いながらも、将来はさぞ美人になるだろうかと予想させる女の

子の顔が、悲しげに歪んだ。

「…ごめんなさい」

何で、この子が謝るのか。怪しい私の素性を知らうとするのは、

至極当然のことだ。

「あ、謝らないで!ね?」

申し訳なさそうに頂垂れてしまった女の子に、笑いかける。女の

子は、なぜかはつとして顔を上げた。

その顔が、一瞬辛そうだったのは気のせいじゃない。

お人好しだ。びっくりするくらい、お人好しだ。

屋敷の庭木の上で、大怪我して気絶していた正体不明の女を、こんなふうに献身的に介抱するか普通？

忍びの私は、このお屋敷の人達のあまりの不用心さとお人好しさに、呆れかつ感心していた。

初めの頃は、何か裏があると勘繰っていた私だったが、今ではそんな気もない。

「…お姉さん、痛みますか？」

そうっと、障子の隙間から覗く真つ黒な目。

「小菊ちゃん？…ううん、大分よくなってきたから、全然痛まないよ」

たどり着いたのが、ここではなかったら死んでいた。獣に襲われるか、人に襲われるかして。

「お屋敷のみなさんには、本当にお世話になったなあ…死なずにすんだのは、小菊ちゃんが私を見つけてくれたおかげだね」

こつちにおいで〜と手招きする。小菊ちゃんは人を気遣う子で、大人しくて優しい。恩人に対して失礼だとわかってるが、妹のように思っている。

……あの子みたい。

半身を起こした私の横。ちよこんと座る小菊ちゃんを見るたび、亡くした部下を思い出す。

『燕様が、私の憧れです！』

目を輝かせて、私の後をついてきていたあの子。鳥のひなみたいだなと、他の部下に笑われても構わずついてきていた。

尊敬の眼差しは、むずがゆかったけれど。あの子も他の部下も、大事な『仲間』だった。

「…お姉さん、傷が癒えたらどうされるのですか？」



小菊ちゃん言葉に、遠い目をして回想していた私は引き戻される。

「…え？うーん…仲間も亡くしたし、旅ももうこりこりだし…どうしようかなあ」

まさか忍びですとは言えず、私は嘘を吐いた。「仲間と旅をしていたが、野盗に襲われて大怪我をして、必死で逃げたらこのお屋敷の木の上にいた」…これで誰も疑いもせず納得するのだから、本当に心配になる。

あの馬鹿殿が治めていた国は、滅んだ。無様に生き永らえた私は、もう『忍び』とは呼べない。

…ただの、名もない女だ。

「行くあてがないのなら…ここに、いてくれませんか？」

「え!？」

突然の申し出。…いいの？

「…お姉さんが、嫌じゃなければ…ですけど」

いかがですかと、重ねて訊いてくる小菊ちゃん。

嫌なわけがない。傷が治ったら、このお屋敷で雇ってもらえない

かなとか考えていた私は、ものすごい勢いで首を振った。

もちろん、縦に。

小雀の記憶　くあるくノ一の過去く（後書き）

前話『日輪の御前で溶けぬものなし』で、一章だと思ってください  
れば…。今回から、小雀編です。彼女も愛おしい…！

気持ちを切り替えて、書きます…！まどろみの元就様への想いと、  
小説への情熱は、尽きることはありません！

まだまだ至らぬことだらけの作品ですが、これからもよろしくお  
願いします…！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4170z/>

---

天に輝く日輪の如く

2011年12月31日01時47分発行